

研究報告

北海道農村部住民の「幸福度」と地域ブランド・エクイティの評価

—大学生の事例を中心に—

清水池義治¹⁾＊、吉中季子²⁾、安藤清一³⁾

¹⁾ 名寄市立大学保健福祉学部教養教育部、²⁾ 名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科、

³⁾ 名寄市立大学保健福祉学部栄養学科

キーワード：幸福度、地域ブランド・エクイティ、北海道農村部住民

1. はじめに

近年、国家や地方自治体において「幸福度」指標を政策的に活用しようとする動きが進んでいる。この背景には、人間の幸福感を測る指標として「自己申告による主観的幸福」の優れている点が先行研究によって明らかにされてきていることがある（Frey (2008)、白石訳〔2008〕pp. 22-24 参照）。行政の目的を国民・住民の幸福感向上と捉えたうえで、行政施策の立案や評価に自己申告にもとづく「幸福度」指標を用いるのである。日本国内の地方自治体では、東京都荒川区で先進的な取り組みが見られるほか、「幸福度」指標を政策的に活用しようとする自治体間で連携する動きも生じている（「幸せリーグ」事務局編〔2014〕参照）。その一方で、住民の幸福感を測る適切な指標設定の難しさや、実際に行政施策を行う中での「幸福度」指標の活用方法の未確立などが、先行して取り組む自治体の事例で指摘されている（荒川区自治総合研究所〔2012〕、清水池・吉中〔2014〕を参照）。

現時点では、自治体行政における「幸福度」指標の活用は住民の幸福感をアンケート等で把握する段階にとどまっている場合が多いと思われるが、住民の幸福感は地域によって差があるのであろうか。幸福感の説明変数には地域環境や自治体施策など地域によって異なる要素も含まれると考えられるため、その結果として地域による幸福感の違いの生じる可能性が指摘できる。この点に関する先行研究として、山根ほか〔2008〕は、都道府県間の幸福感格差は所得格差より小さく、2000年代前半に所得格差は拡大したものの幸福度の格差は拡大していないことを示した。町野〔2013〕では、北海道を5地域に分けて、主観的指標と客観的指標を組み合わせた「豊かさ指標」を試算し、地域間で差が出たことを明らかにした。辻〔2011〕は、所得上昇による幸福感への影響度合いは、大都市圏と比較して地方圏で小さいことを指摘した。以上をまとめると、幸福感の水準自体、ならびに幸福感の説明変数について地域による差異のあることが示唆される。

ところで、地域ブランド・エクイティは、特定の地域をひとつのブランドと捉え、その地域を評価する消費者によって形成されるブランドの資産価値を指す概念である（Shimizuke (2013)参照）。具体的には、地域への愛着や、地域産品の購入意向、居住・訪問意向などによって評価されることが多い。ある地域に居住する住民の幸福感と、その住民の居住地域に対する地域ブランド・エクイティの評価は何らかの関係性を有すると考えられる。仮にそうであるならば、地域住民の幸福感を高めることは、住民の地域への愛着や居住継続意欲の向上を通じて、地域社会の持続性を高める意義もあることが確認できるだろう。

本論文の課題は、北海道農村部に居住する住民（以下、北海道農村部住民）を対象に、「幸福度」と地域ブランド・エクイティ評価との関係性を明らかにすることである。分析対象は名寄市立大学の学生が中心となるが、これら学生は北海道農村部に居住するが、その居住地域出身ではない若年層という位置づけである。非出身者の若年層に焦点を当てる理由は、少子高齢化が一層進むことが確実な状況下で、特に農村部におい

＊責任著者

住所 〒096-8641 北海道名寄市西4条北8丁目1番地

E-mail: shimizuke@nayoro.ac.jp

て、非出身者である若年層の居住地に対する評価が、今後の地域社会の存立にとって重要と考えるからである。以上の課題を明らかにするために、まず、北海道斜里町を事例に「幸福度」指標の活用実態を述べる。次に、斜里町民と名寄市立大学学生の「幸福度」を用いて、北海道農村部住民の「幸福度」の特徴を指摘する。続いて、名寄市立大学学生を対象に、「幸福度」と地域ブランド・エクイティの評価との関係性を分析し、北海道農村部住民の「幸福度」と地域ブランド・エクイティに関する仮説を提示したい。

2. 北海道農村部における「幸福度」指標の政策的活用—北海道斜里町を事例に—

(1) 斜里町の概要¹⁾

斜里町は、北海道の北東端である知床半島の北西側、オホーツク海沿岸に位置する地方自治体である。2014年12月末現在、町の人口は12,186名である。100kmを超える長大な海岸線を有し、羅臼町と二分する知床半島の豊かな自然環境に恵まれている。斜里町では開拓離農跡地を乱開発から守るナショナルトラスト運動に1970年代から取り組み、その結果として2005年には知床半島および周辺海域がユネスコの世界自然遺産に登録された。

斜里町の主要産業は、上述の自然環境を活用した農業・漁業・観光業である。小麦・甜菜・馬鈴薯といった畑作農業が盛んであり、漁業についてはサケ・マス中心の沿岸漁業である。また、これら農漁業に関連する食品加工業も発達しており、地域住民に雇用の場を提供している。観光の中心地は町の北東部のウトロ地区で知床五湖といった観光資源があり、大小の温泉宿が存在する。知床半島の世界自然遺産登録後は観光客が急増、近年では若干減少したものの、斜里町を訪れる観光客数は2013年度で約122万人に達している²⁾。2013年12月時点の自治体人口（住民基本台帳）で観光客数を除すると、北海道全体で24.0倍、名寄市13.0倍に対し、斜里町は97.0倍であり、観光客数の多さが分かる。また、観光入込客数に占める宿泊客比率も36.2%と、北海道全体の18.2%より2倍近く高い³⁾。

図1は、平成22年国勢調査をもとに、斜里町・名寄市・北海道の産業別就業者数割合を比較したものである。上述の産業構造を反映して、斜里町は農漁業で2割強、製造業（食品加工業が主体）で1割強、宿泊・飲食サービス業で1割強と、北海道全体の数値と比較して高い比率となっている。一方で、卸・小売業、その他サービス業、医療福祉の比率は比較対象より低い。名寄市は、北海道全体と比較すると、農漁業と公務の比率が高く、製造業比率の低いほかは、概ね北海道と似通った産業別割合となっている。

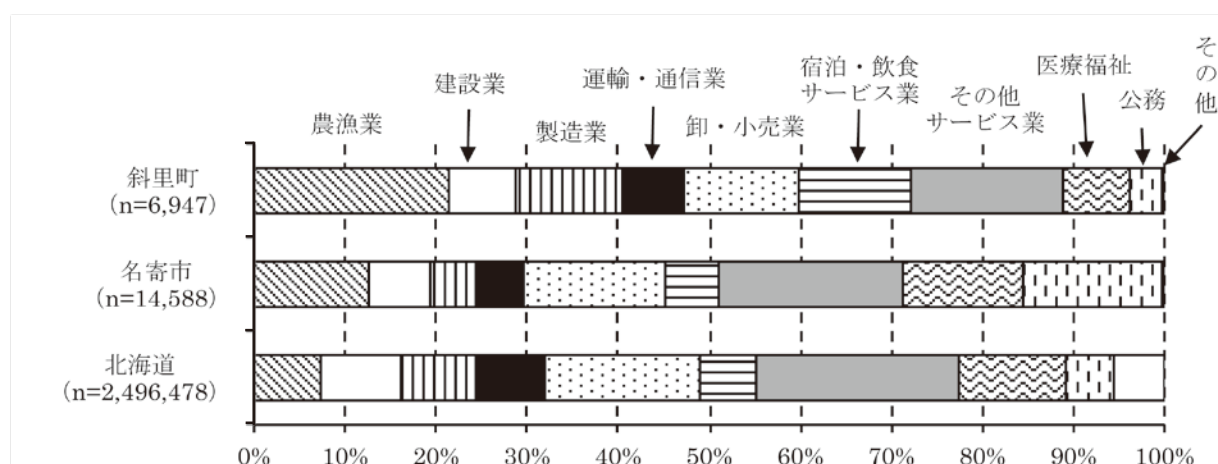


図1 産業別就業者数割合の比較

資料：「平成22年国勢調査」より作成。

註：産業大分類をもとに筆者らが産業分類数を集約。

（２）斜里町における「幸福度」指標の導入経緯と活用実態⁴⁾

斜里町政における「幸福度」指標の活用は、2011年5月に現町長である馬場隆氏が斜里町長に当選したことに始まる。馬場町長は、プータンの国民総幸福量（GNH）に感銘を受け、町民が日々の生活で幸せを実感できることこそ重要であって、町政運営は何らかの「幸福度」指標によってその成果を推し測ることができるとの考えに立っている。町政スローガンは「幸せ実感！あったか斜里町」であり、2014年度からスタートした第6次斜里町総合計画の基本テーマは「幸せを実感できる住みよいまちづくり」である。「幸福度」指標の政策的活用に取り組む地方自治体で構成される「幸せリーグ」にも斜里町は参画し、他の自治体とも連携した取り組みを志向している⁵⁾。

2012年10月、斜里町庁内に町職員20名程度から構成される「斜里町民総幸福度指標導入プロジェクトチーム」（通称：幸せPT）が設置された。幸せPTには、さらに「しらべるワーキンググループ」と「しらせるワーキンググループ」を設け、「幸福度」の指標作成と「幸福度」に関する住民アンケートを行うことを任務とした。この幸せPTは企画総務部企画係を事務局として、庁内他部署・町立国保病院など幅広いセクションの職員から構成され、年齢層としては若手職員が中心である。

「幸福度」に関する住民アンケートは、2014年度から開始される第6次総合計画策定に向けた住民向けアンケート調査に盛り込まれる形で、2013年3月に実施された（結果は本稿第3節を参照）。「幸福度」調査に関する全国の事例を踏まえ、2013年3月のアンケート調査は方法論の検討も兼ねた予備的調査と位置づけ、斜里町の独自性を反映した設問は設定しなかった。具体的には、全国調査結果と斜里町の結果とを比較できるように、内閣府経済社会研究所〔2011〕における「幸福度」の考え方と指標試案にもとづく設問とした。

斜里町民の「幸福度」に関するアンケート結果は、第6次総合計画の内容に一部反映された。7つある基本目標のうち、医療福祉子育て分野である基本目標5「いきいきと自分らしく健やかに暮らせるまちをめざす」の基本施策等に活かされている。

（３）今後の展開と課題

第6次総合計画は5年後の2019年に見直しが行われる。幸せPTでは総合計画見直しに反映できるように、住民の「幸福度」に関する調査活動を予定している。総合計画には7つの基本目標があるが、5年間で基本目標ごとに住民の「幸福度」・満足度に関するアンケートを実施する予定である。

今後の課題としては以下の3点を指摘できる。

第1に、「幸福度」に関わっている職員が一部に限られ、「幸福度」を行政施策に導入する意義が役場全体で共有されていないことである。担当部署である企画総務課企画係と幸せPTに属する一部の職員に関しては意識が高いものの、その他の職員に関してはまだ「幸福度」に関する理解が進んでいない。幸せPTの活動も決して活発とは言えない状況であるため、幸せPT自体の活動をいかに活発化させるかも課題である。

第2として、第1の点と関係するが、公務における「幸福度」指標が必要なかどうか職員の中でも疑問視する声のある点である。役場職員・住民も含めて、幸せの価値観が多様であるため、特定の限定された指標によって主観的な幸福感を正確に測れるのかという指摘もある。「幸福度」指標と行政の業務内容をどのように関連付けるかなど、「幸福度」指標を政策的に活用する方法論が未確立である点に、この課題は由来すると言える。

第3に、「幸福度」指標にもとづく施策の継続性がある。現在は馬場町政であるがゆえに「幸福度」が行政施策の中に位置づけられていると言え、町長が交代すれば幸福度指標が活用されなくなる可能性がある。形式的には条例として位置づけることが求められるが、住民や職員に「幸福度」の意義がどの程度浸透・定着するかが実質的には重要であろう。

3. 北海道農村部住民の「幸福度」の特徴

(1) アンケート回答者の基本属性

本節では北海道北部住民の「幸福度」の特徴を明らかにする。以下では、斜里町ほか〔2013〕（以下、斜里町 2013）、名寄市立大学学生を対象に 2014 年 11 月に実施した「大学生の幸福度に関するアンケート」調査結果（以下、名寄市・大学生 2014）、内閣府「平成 22 年国民生活選好度調査結果」（以下、内閣府 2010）の 3 つのアンケート結果を用いて分析を行う。

表 1 に、今回利用する 3 アンケートの概要と回答者の基本属性を示した。斜里町 2013 は斜里町民、名寄市・大学生 2014 は名寄市立大学学生、内閣府 2010 は全国に居住する男女を調査対象とした。それぞれ有効回答数は、793、192、3,578 である。斜里町 2013 と内閣府 2010 のアンケート対象者抽出方法は無作為抽出であるが、名寄市・大学生 2014 は作為的抽出である点に留意が必要である。

回答者の男女構成は、斜里町 2013 と内閣府 2010 は概ね均等であるが、名寄市・大学生 2014 は学生全体の男女比率を反映して女性が約 8 割と男性よりかなり多くなっている。年齢構成は、斜里町 2013 で 60 代以上が

約半数、30 代以下が約 2 割で高齢層に偏っている。それに対して、内閣府 2010 は 60 代以上および 30 代以下がともに約 3 割であり、年齢層の偏りは小さい。名寄市・大学生 2014 は全員が 18 歳から 22 歳の間の年齢構成である。

表示していないが、職業をみると、斜里町 2013 では「無職」24%・「専業主婦・主夫」16%・「農林漁業」13%

表1 利用アンケートの概要と回答者の基本属性

	斜里町2013	名寄市・大学生2014	内閣府2010
実施時期	2013年3月～4月	2014年11月～12月	2011年3月
アンケート実施対象	2013年2月28日に斜里町住民基本台帳に登録のある18歳以上の町民	名寄市立大学学生	全国に居住する15歳以上80歳未満の男女
対象者の抽出方法	1,500名を無作為抽出	特定講義への出席者	5,000名を無作為抽出
有効回答数	793	192	3,578
男女構成	男性 45.4% 女性 54.6%	男性 18.8% 女性 81.3%	男性 48.7% 女性 51.3%
年齢構成	20代以下 8.9% 30代 11.5% 40代 14.3% 50代 17.0% 60代 25.5% 70代 17.2% 80代以上 6.6%	全員が18～22歳	10代 5.6% 20代 10.8% 30代 16.7% 40代 16.3% 50代 17.7% 60代 21.2% 70代 11.7%
その他属性		(出身地) 名寄市 5.2% 道内・都市部 37.0% 道内・農村部 18.8% 道外・都市部 15.6% 道外・農村部 23.4% (学科) 栄養学科 15.1% 看護学科 24.5% 社会福祉学科 58.3% 児童学科 2.1% (学年) 1年 51.7% 2年 25.0% 3年 14.1% 4年 6.3%	

資料：斜里町ほか〔2013〕、「大学生の幸福度に関するアンケート」（2014年11月）調査結果、「平成22年度国民生活選好度調査結果」より作成。

註：名寄市・大学生2014の「出身地」は、アンケート項目の表記としては「出身地（人生の多くを過ごした地域）」である。

に対し、内閣府 2010 では「会社員」（非公務員・非管理職）22%・「派遣・パート・アルバイト」17%・「無職」16%と、後者の方がやや勤労層が多い。

名寄市・大学生 2014 の回答者の出身地⁶⁾は、多い順に、道内・都市部（名寄市除く）37.0%、道外・農村部 23.4%、道内・農村部（名寄市除く）18.8%、道外・都市部 15.6%であり、大学の立地する名寄市を出身地とする回答者は 5.2%にすぎない。学科・学年構成については、筆者らの担当する講義でのアンケート実施となったため、学年では 1 年生、学科では社会福祉学科に偏っている。

（2）北海道農村部住民の「幸福度」

1）「幸福度」

次に、3つのアンケートにおける「幸福度」に関する回答結果を検討する。3つのアンケートでは全て、回答時点での回答者の主観的な幸福感を、「とても幸せ」10点から「とても不幸」0点までの11段階評価で尋ねている。

各アンケートについて、得点ごとの回答数分布を比率で示したのが図2である。各アンケートの「幸福度」平均点は、斜里町 2013 で 6.60、名寄市・大学生 2014 で 6.53、内閣府 2010 で 6.46 であり、大きな差はないと言える。回答分布は、3アンケート

いずれも同様の形状を示しているが、斜里町 2013 と内閣府 2010 で見られる、5点と、7点・8点を2つの頂点とするM字形状を名寄市・大学生 2014 は取っていない。名寄市・大学生 2014 は7点・6点・5点といった平均点付近をピークとする、なだらかな山型の分布形状となっている。斜里町 2013 と内閣府 2010 はほぼ同様の分布となっているので、この違いは大学生という属性に由来する可能性がある⁷⁾。

回答者属性ごとに「幸福度」を検討すると、女性は男性より、60代以上ないし70代以上はその他年齢層より（名寄市・大学生 2014 を除く）「幸福度」の高い傾向が、3つのアンケートに共通してみられる。また、斜里町 2013 によると、「農林漁業」「専業主婦・主夫」、三世代家族で「幸福度」が高く、逆に借家一戸建て・公営住宅、「工業・建設業等」「パート・アルバイト」「公務員」、一人暮らしで「幸福度」が低い。

名寄市・大学生 2014 では、出身地と学年の2属性で「幸福度」の差が確認できた。出身地は名寄市、道内・都市部、道内・農村部、道外・都市部、道外・農村部の5群、学年は1年・2年・3年・4年の4群において、「幸福度」に群間で差があるかどうか、一元配置分散分析と多重比較を行って検討した。それらの結果を表2に示した。これによれば、出身地では道外・農村部は道内・都市部および道内・農村部より、学年では3年は4年より「幸福度」が有意に低かった。また、統計的に有意差はないものの、道外出身者は道内出身者より「幸福度」の低い傾向にある。これは大学入学以降の生活環境の変化や出身地・家族との空間的・時間的距離の大きさが影響していると推察できるが、同じ道外でも都市部と農村部の「幸福度」の差は小さくなく、現時点ではこの差を合理的に説明できる論拠はない。3年と4年における差は、学生にとって関心の高い実習や就職活動が関係していると思われるが、これも仮説の域を出ない。

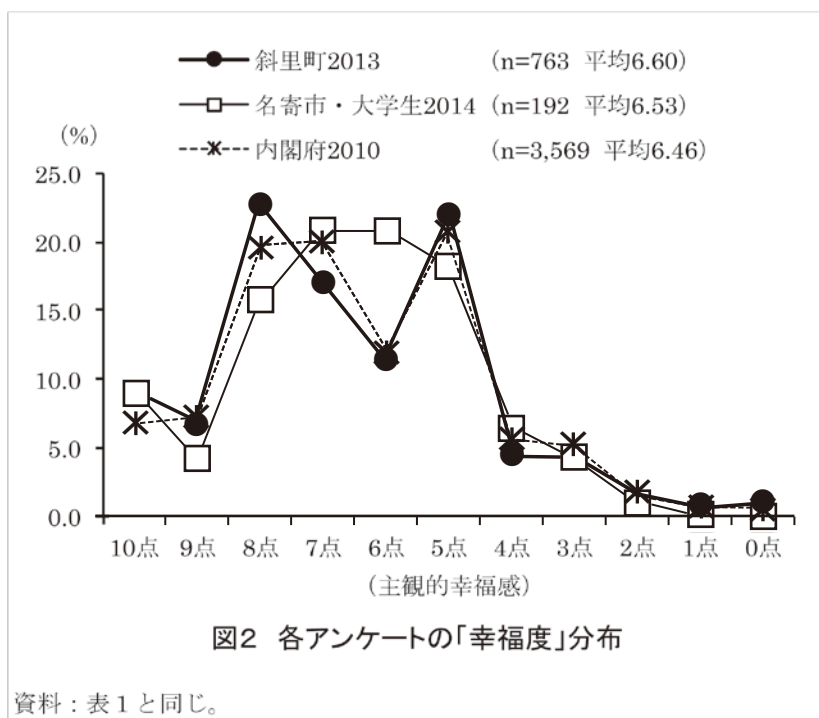


表2 名寄市・大学生2014の「幸福度」と出身地・学年に関する多重比較

			「幸福度」		自由度	F値
			平均	標準偏差		
出身地 2>5、3>5	1	名寄市 (n=10)	7.300	0.4726	郡間4 郡内187	4.101**
	2	道内・都市部 (n=71)	6.803	0.2166		
	3	道内・農村部 (n=36)	6.944	0.2953		
	4	道外・都市部 (n=30)	6.400	0.3794		
	5	道外・農村部 (n=45)	5.667	0.2225		
学年 4>3	1	1年 (n=105)	6.667	1.6965	群間3 群内188	3.278**
	2	2年 (n=48)	6.375	1.6325		
	3	3年 (n=27)	5.778	2.2758		
	4	4年 (n=12)	7.583	2.0652		

註：** $p<0.05$

2) 「幸福度」の判断基準と重視事項

表3に、各アンケートにおける「幸福度」判断基準の選択率を示した。斜里町2013と名寄市・大学生2014はほとんど同じ傾向で、どちらも選択率の高い順に「自分の理想との比較」「将来への期待」「過去の自分との比較」「他人との比較」となっている。それに対して、内閣府2010では、「自分の理想との比較」、「将来への期待」および「他人との比較」が他2つのアンケートより高い選択率になっていると言える。「自分の理想との比較」については内閣府2010の回答者は斜里町2013と比較して年齢層の若いこと、「他人との比較」については内閣府2010の回答者は勤労層が多く競争的な環境に置かれていることが要因のひとつとして考えられる。「将来への期待」については違いを合理的に説明できる要因を推定できなかったが、北海道の地域性を反映している可能性は否定できない。この点に関しては、「自分の理想との比較」「他人との比較」に関しても同様に指摘できる。

名寄市・大学生2014の回答者を対象

に、選択した「幸福度」判断基準によって「幸福度」に差があるかどうかを一元配置分散分析により検討した。その結果、「過去の自分との比較」を選択した回答者（「幸福度」平均点6.16）はそうでない回答者（同6.76）より、「他人との比較」を選択した回答者（同5.48）はそうではない回答者（同6.71）より、「幸福度」が5%水準で有意に低かった⁸⁾。名寄市立大学学生については、自分の過去や他人を基準に「幸福度」を判断する者は「幸福度」の低くなる傾向があり、個人の物事の考え方や性格を反映した結果と思われる。

続いて、回答者が幸福感を判断する際に重視した事項について、15項目から複数選択で回答した結果が表4である。斜里町2013については、大学生と同じ年齢層を含む「20代以下」の選択率も示した。なお、内閣府2010は「自然環境」「豊かな住環境」「その他」の設問項目がないため、他のアンケート結果との比較の際には注意が必要である。

表3 各アンケートにおける「幸福度」判断基準の選択率

単位：%

	斜里町2013 (n=744)	名寄市・ 大学生2014 (n=192)	内閣府2010 (n=3,564)
自分の理想との比較	47.8	54.7	60.9
将来への期待	39.2	39.6	62.1
過去の自分との比較	38.3	39.1	32.4
他人との比較	14.7	15.1	28.4

資料：表1と同じ。

註：1) 表中の数値は、その判断基準を選択した回答者の比率を示す。

2) 判断基準の選択数は2つまでと限定している。

まず指摘できるのは、選択率水準にやや差のある場合があるものの、斜里町 2013・全体と内閣府 2010 とでは重視事項の序列がほぼ同じ点である。前者の回答者属性は後者と比べて年齢層が高齢層に偏り、勤労層が相対的に少ないという差異があるが、こういった属性はあまり「幸福度」の重視事項に違いをもたらさないようである。むしろ、斜里町 2013・全体と斜里町 2013・20 代以下との間に、いくつかの事項で選択率水準に大きな差が見られる。具体的に言うと、斜里町 2013・20 代以下は「友人関係」「就業状況」「職場の人間関係」で全体と比較して選択率が 20 ポイント程度も高い。こういった傾向は、内閣府 2010 の同年代層（表示せず）と同様である。

次に、名寄市・大学生 2014 は、斜里町 2013 と内閣府 2010 と比較すると、「友人関係」「充実した余暇」「職場（大学）の人間関係」で突出して選択率が高く、「健康状況」「家族関係」「家計状況」で選択率が低い。また、斜里町 2013・20 代以下と、同年代である名寄市・大学生 2014 は、重視事項の序列が概ね同様になっている。名寄市・大学生 2014 は、斜里町 2013・20 代以下と比べて「就業状況」「家族関係」で選択率が低いという違いがあるが、これは大学生のため就業していないことと家族と別居して生活している点が要因と思われる。

このように「幸福度」の重視事項は、地域やその他属性による差よりは、若年層とそれ以外の年齢層との差が明瞭であると指摘できる。

表4 各アンケートにおける「幸福度」重視事項の選択率

単位：％

重視事項	斜里町2013 (n=767)		うち20代以下 (n=61)		名寄市・ 大学生2014 (n=192)	内閣府2010 (n=3, 573)
健康状況	60.1	(1)	44.3	(5)	37.5 (7)	65.4 (1)
家族関係	55.8	(2)	62.3	(1)	38.0 (6)	65.2 (2)
家計状況	49.9	(3)	47.5	(4)	35.9 (8)	62.1 (3)
精神的なゆとり	38.3	(4)	44.3	(5)	49.5 (3)	51.0 (4)
友人関係	36.2	(5)	59.0	(2)	72.9 (1)	36.6 (5)
自由な時間	30.5	(6)	31.1	(7)	43.2 (5)	33.7 (7)
就業状況	27.8	(7)	50.8	(3)	13.0 (11)	35.7 (6)
自然環境	26.6	(8)	18.0	(12)	5.7 (14)	－
良好な住環境	19.0	(9)	24.6	(10)	15.6 (10)	－
仕事の充実度	18.4	(10)	23.0	(11)	11.5 (12)	21.0 (10)
趣味等の生きがい	17.1	(11)	18.0	(12)	28.1 (9)	25.2 (8)
充実した余暇	15.9	(12)	27.9	(9)	44.3 (4)	24.9 (9)
職場（大学）の人間関係	13.8	(13)	31.1	(7)	50.0 (2)	16.3 (11)
地域との関係	9.9	(14)	11.5	(14)	6.8 (13)	10.3 (12)
その他	2.0	(15)	3.3	(15)	1.0 (15)	－

資料：表 1 と同じ。

註：１）表中の数値は、その重視事項を選択した回答者の比率を示す。

２）重視事項は複数選択を可としている。

３）カッコ内の数値は重視事項選択率の順位を示している。網掛けは上位 5 位以内の事項。

４）内閣府 2010 とそれ以外のアンケートでは設問項目で提示した重視事項が一部異なる。

(3) 幸福感構成要素の満足度

内閣府社会経済研究所〔2011〕では、主観的幸福感に影響を及ぼす3つの「柱」として「経済社会状態」「心身の健康」「関係性」を想定し、各「柱」の下に合計11の小項目（指標）を設定した。すなわち、「経済社会状態」には「基本的ニーズ」「住居」「子育て・教育」「雇用」「社会制度」の5つ、「心身の健康」には「身体的健康」「精神的健康」の2つ、「関係性」には「ライフスタイル」「家族とのつながり」「地域とのつながり」「自然とのつながり」の4つである。これを受けて、斜里町2013では表5のような設問内容と5段階評価の選択肢で、町民の幸福感構成要素の満足度を測定した。名寄市・大学生2014では、基本的に斜里町2013と同じ内容でアンケート調査を実施した。ただし、大学生にそぐわない「子育て・教育」の小項目を削除したため、全体の設問数は10となっている。また、雇用に関する設問は、「自分の仕事」ではなく「大学生としての生活」に文言を変更した。

表5 幸福感構成要素に関する設問内容と回答選択肢

	設問内容				
家計状況	自分の家計状況（所得や消費生活）に満足していますか？				
住居	今住んでいる住宅や周辺の住環境に満足していますか？				
雇用（大学生）	自分の仕事（大学生としての生活）に満足していますか？				
社会制度	自分の日常生活を取りまく社会制度（例えば、年金や健康保険、雇用諸策、公営住宅、教育制度など、主に国の制度）について、満足していますか？				
身体的健康	自分の身体は健康だと思いますか？				
精神的健康	学業・仕事・家庭・人間関係など日常生活で、精神的なストレスはありますか？				
ライフスタイル	自分のライフスタイル（仕事・趣味・食事・休息・睡眠などの内容やバランスなど）について、満足していますか？				
家族関係	ご家族との関係は良好ですか？				
地域関係	身近な地域社会との関係やつながり（友人関係や近所付き合い、困ったときの助け合いなど）に満足していますか？				
文化自然関係	自分の周りの文化や自然などとの関係やつながりに満足していますか？				
選択肢	5	4	3	2	1
家計状況・ 住居・雇用（大 学生）・ライ フスタイル・地 域関係・文化自然 関係	満足	やや満足	どちらでもない	やや不満	不満
身体的健康	健康	やや健康	どちらでもない	やや不健康	不健康
精神的健康	多い	やや多い	どちらでもない	あまりない	ない
家族関係	良好	やや良好	どちらでもない	あまり良好ではない	良好ではない

資料：斜里町ほか〔2013〕、「大学生の幸福度に関するアンケート」（2014年11月）より作成。

表6は、斜里町2013・全体、同・20代以下、名寄市・大学生2014における幸福感構成要素の満足度の結果である。満足度の高い上位3位以内の項目は、斜里町2013・全体では「家族関係」「地域関係」「住居」、斜里町2013・20代以下では「家族関係」「身体的健康」「地域関係」である。それに対し、名寄市・大学生2014では、「家族関係」「身体的健康」「文化自然関係」となっている。斜里町2013・全体と比較すると、斜里町2013・20代以下では「住居」が外れて「身体的健康」が加わり、名寄市・大学生2014では同じく「住居」が外れて「文化自然

表6 各アンケートにおける幸福感構成要素の満足度

	斜里町2013			名寄市・大学生2014 (n=192)	
	標本数	平均	うち20代以下 平均	平均	標準偏差
家計状況	n=772	3.16	2.89	3.47	1.175
住居	n=775	3.46	3.08	3.20	1.191
雇用（大学生）	n=694	3.19	2.67	3.33	1.064
社会制度	n=772	2.53	2.41	2.90	0.803
身体的健康	n=779	3.41	4.02	3.96	1.045
精神的健康	n=769	2.84	2.64	2.66	1.046
ライフスタイル	n=774	3.40	3.23	3.03	0.994
家族関係	n=769	4.17	4.25	4.58	0.846
地域関係	n=772	3.62	3.54	3.69	0.895
文化自然関係	n=773	3.43	3.39	3.84	6.946

資料：斜里町ほか〔2013〕、「大学生の幸福度に関するアンケート」（2014年11月）調査結果より作成。

註：斜里町2013と名寄市・大学生2014はともに、精神的健康に関する設問は実際には「多い」5点から「ない」1点とする順であったが、分析の都合上、「ない」5点から「多い」1点とする順に入れ替えている。

関係」が加わっている。逆に、満足度が2点台以下の低い項目は、斜里町2013・全体で「社会制度」「精神的健康」、斜里町2013・20代以下で「社会制度」「精神的健康」「雇用」、名寄市・大学生2014で「精神的健康」「社会制度」である。低い項目は概ね共通していると言える。

次に、満足度水準の比較を行う。斜里町2013・全体と同・20代以下を比べると、満足度が同水準なのは「家族関係」「地域関係」「文化自然関係」「ライフスタイル」「精神的健康」「社会制度」の6要素、前者が後者より高いのは「住居」「家計状況」「雇用」の3要素、逆に低いのは「身体的健康」の1要素のみである。若年層で「住居」「家計状況」「雇用」満足度が相対的に低い要因は、一戸建て居住者が少ない、給与（≒所得）が非若年者より相対的に低いといった理由が挙げられる。満足度だけをみると、20代以下で全体を下回る満足度が3つあるが、「幸福度」平均点は全体6.60に対して、20代以下6.62であり、ほぼ同じである。

斜里町2013・20代以下と同年代の名寄市・大学生2014を比較すると、満足度が同水準なのは「身体的健康」「地域関係」「住居」「精神的健康」「ライフスタイル」の5要素、前者が後者より高い要素はなく、逆に低いのは「家族関係」「家計状況」「雇用（大学生）」「文化自然関係」「社会制度」の5要素となっている。大学生で「家族関係」「家計状況」「雇用（大学生）」「文化自然関係」「社会制度」満足度が相対的に高い理由として、仕送りや奨学金など経済的に完全に自立していない者が多い、社会人として社会制度に接していないといった要因を挙げられるが、要素によっては合理的な説明を見いだせないものもある。なお、斜里町2013・20代以下は大学生より満足度の低い要素が多いが、「幸福度」平均点を比べると、前者6.62、後者6.53となり、ほぼ同じである。

上述における主観的幸福感構成要素の満足度と「幸福度」との関係性を見ると、各要素は必ずしも均等に「幸福度」へ影響を及ぼしているわけではないことが推察される。そこで、主観的幸福感構成要素がそれぞれの程度の影響度をもって「幸福度」を変化させているかを把握するため、「幸福度」を目的変数、10の主観的幸福感構成要素を説明変数とする重回帰分析を名寄市・大学生2014を対象に行った。分析の結果得られた各要素の標準偏回帰係数を表7に示した。これによれば、説明率（ R^2 ）は0.391であり、高いとは言え

ない。有意な標準偏回帰係数の得られた要素を係数絶対値の大きい順に並べると、「大学生」(0.279)、「精神的健康」(-0.168)、「ライフスタイル」(0.158)、「家計状況」「家族関係」(ともに0.116)であり、合計5要素であった。前掲表4に示した「幸福度」の回答者の主観的な重視事項は、大学生の場合、「友人関係」「大学の人間関係」「精神的ゆとり」「充実した余暇」「自由な時間」「家族関係」の順に選択率が高かった。「大学生としての生活」に友人関係や余暇も含まれるとするならば、表7と表4の結果は概ね符合すると解釈できる。なお、主観的な重視事項では「家計状況」は8番目の選択率であったが、選択率自体は「家族関係」と大差なく、前述の解釈を否定するものではないと言える。

(4) 北海道農村部住民の「幸福度」の特徴

以上の分析から、北海道農村部住民の「幸福度」の特徴を指摘する。まず、「幸福度」水準や分布に北海道農村部住民に特有の傾向は見いだせなかった。「幸福度」判断基準では「将来への期待」「他人との比較」の選択率が低く、職業属性の差が要因と考えられるが、北海道の地域性を反映している可能性もある。

「幸福度」の主観的な重視事項については、地域差はあまりなく、若年層と非若年層との間の違いが示唆された。幸福感構成要素では、「家族関係」「地域関係」「身体的健康」「文化自然関係」で満足度が高く、「精神的健康」「社会制度」「雇用(大学生除く)」で満足度が低かった。

表7 「幸福度」を目的変数、幸福感構成要素を説明変数とする重回帰分析における標準偏回帰係数

幸福感構成要素	標準偏回帰係数
家計状況	0.116 *
住居	-0.068
大学生	0.279 ***
社会制度	-0.012
身体的健康	0.096
精神的健康	-0.168 **
ライフスタイル	0.158 **
家族関係	0.116 *
地域関係	0.108
文化自然関係	0.036
説明率 (R ²)	0.391 ***

註：1) * $p<0.1$ 、** $p<0.05$ 、*** $p<0.01$

2) 精神的健康に関する設問の回答は、設問通り「多い」5点から「ない」1点としている。

4. 「幸福度」と地域ブランド・エクイティ評価との関係性—大学生を対象として—

(1) 地域ブランド・エクイティの概念と評価方法

本節では、名寄市立大学学生を対象に、「幸福度」と地域ブランド・エクイティ評価との関係性を検討する。

最初に、地域ブランド・エクイティの概念を確認しておく。第1節で述べたように、地域ブランド・エクイティは、特定の地域をひとつのブランドと捉え(=地域ブランド)、その地域を評価する消費者によって形成されるブランドの資産価値を指す概念である。地域ブランドは、特定の地理的範囲・地域空間がブランドとなる地域空間ブランドと、地域で産出される財やサービスがブランドとなる地域資源ブランドから構成され、それぞれ、地域空間ブランド・エクイティ、地域資源ブランド・エクイティとして把握できる⁹⁾。本論文では、これら2つのブランド・エクイティを総括した概念として、地域ブランド・エクイティを用いる。

この地域ブランド・エクイティを評価する方法として、株式会社日経リサーチ「地域ブランド戦略サーベイ2013」を参考に、表8に示した設問内容と回答選択肢を設定した。評価項目は、「独自性」を感じるか、「愛着」を感じるか、地域産品の「購入意欲」があるか、その地域への「居留意欲」があるかの4項目である。設問対象となる地域は、回答者の出身市町村(人生の多くの時間を過ごした時間。以下、出身地)、ならびに大学の立地する自治体である名寄市であり、名寄市立大学学生に回答を求めた。

有効回答数や回答者属性といったアンケート概要は、表1に掲載した名寄市・大学生2014の通りである。なお、回答者192名のうち名寄市出身者は10名で、1名を除く全員が名寄市に居住している。

表8 地域ブランド・エクイティ評価に関する設問内容と回答選択肢

評価項目	設問内容				
独自性	あなたの出身市町村（人生の多くの時間を過ごした市町村）／名寄市に、他の地域とは違う独自性を感じますか？				
愛着	あなたの出身市町村（人生の多くの時間を過ごした市町村）／名寄市に、愛着を感じますか？				
購入意欲	あなたの出身市町村（人生の多くの時間を過ごした市町村）／名寄市産の商品を購入したいと思いませんか？				
居住意欲	あなたの出身市町村（人生の多くの時間を過ごした市町村）／名寄市に住みたいと思いませんか？				
選択肢	5	4	3	2	1
独自性・愛着	感じる	やや感じる	どちらともいえない	あまり感じない	感じない
購入意欲	購入したい	やや購入したい	どちらともいえない	あまり購入したくない	購入したくない
居住意欲	住みたい	住んでもよい	どちらともいえない	あまり住みたいくない	住みたいくない

資料：「大学生の幸福度に関するアンケート」（2014年11月）より作成。

（2）出身地および名寄市の地域ブランド・エクイティ評価の比較

表9は、出身地と名寄市に関する地域ブランド・エクイティ評価の平均点、ならびに出身地と名寄市の評価平均点に関するt検定の結果である。

出身地に対する各評価項目の平均点は、高い順に、「愛着」4.500、「購入意欲」4.016、「居住意欲」3.797、「独自性」3.661であり、一様に高くなっている。

一方、名寄市に対する各評価項目の平均点は、同じく高い順に、「独自性」3.245、「購入意欲」3.219、「愛着」2.901、「居住意欲」2.083である。表示したように、全ての項目で出身地が名寄市より有意に平均点が高い。最も差の大きい項目が「居住意欲」（平均点の差1.714）で、続いて「愛着」（同1.599）、「購入意欲」（同0.797）、「独自性」（同0.416）となる。「居住意欲」で「住みたい」「住んでもよい」、「愛着」で「感じる」「やや感じる」を選択した回答者の比率は、それぞれ、出身地65.1%、91.7%に対して、名寄市9.9%、33.9%であり、非常に差は大きいと言えよう。

このように、出身地と名寄市では「独自性」の評価の差は比較的小さいが、特に「居住意欲」と「愛着」で大きな差が生じている。これは、居住期間の長短や出身地における家族の存在が要因と思われる。特定の地域における居住期間が長くなると、その地域への愛着が増し、居住継続の意志が高まるのは自然である。また、表6で見たように「家族関係」の満足度は高く、出身地の評価に影響を与えている可能性がある。

表9 出身地と名寄市に関する地域ブランド・エクイティ評価の平均点（標準偏差）

	出身地	名寄市	自由度	t値
独自性	3.661 (1.1326)	> 3.245 (1.1429)	191	3.937***
愛着	4.500 (0.8376)	> 2.901 (1.1782)	191	16.272***
購入意欲	4.016 (0.9516)	> 3.219 (0.9061)	191	9.869***
居住意欲	3.797 (1.1869)	> 2.083 (1.0700)	191	15.913***

註：*** $p < 0.01$

(3) 地域ブランド・エクイティ評価段階別の「幸福度」

次に、地域ブランド・エクイティ評価段階別の「幸福度」を検討する。表10に出身地、表11に名寄市に関する地域ブランド・エクイティ評価段階別の「幸福度」を示した。「名寄・独自性」のみデータの等分散性が仮定できなかったためクラスカル・ウォリス検定を行ったが、残りの全ての項目は一元配置分散分析および多重比較を行った。

出身地については、「出身地・独自性」の評価段階間で「幸福度」に有意な差があるものの、「出身地・独自性」も含めて考えたとしても、いずれの評価項目でも、評価段階と「幸福度」との間に意味のある関係性は見取れない。上述の有意差はそのまま解釈すると、出身地に独自性を感じないほど「幸福度」が高いということだが、合理的な因果関係の説明は難しい。一方、名寄市に関しては、名寄市に愛着を「やや感じる」者の「幸福度」(6.959)は愛着を「感じない」者の「幸福度」(5.704)より有意に高いという結果が得られた。また、統計的に有意な差はなかったものの、残り3つの評価項目でも、地域ブランド・エクイティ評価が高いほど「幸福度」平均点の高くなる傾向があり、両者の間に何らかの関係性のあることが示唆されよう。

名寄市、換言すれば現在居住地に対する地域ブランド・エクイティ評価と現在の「幸福度」との間に、他の媒介項を経由しない直接的な因果関係があると仮定した場合、以下の2つの可能性が考えられる。すなわち、①現在居住地に対する地域ブランド・エクイティ評価が現在の「幸福度」を規定する可能性、あるいは、逆に、②現在の「幸福度」が現在居住地に対する地域ブランド・エクイティ評価を規定する可能性である。

表10 名寄市・大学生2014の「幸福度」と地域ブランド・エクイティ評価に関する多重比較(出身地)

				「幸福度」		自由度	F値
				平均	標準偏差		
出身地・独自性 1>2 1>3	5	感じる	(n=53)	6.396	2.0971	群間4、 郡内187	3.681***
	4	やや感じる	(n=62)	6.935	1.5668		
	3	どちらともいえない	(n=43)	6.070	1.5796		
	2	あまり感じない	(n=27)	6.111	1.8674		
	1	感じない	(n=7)	8.286	1.7043		
出身地・愛着	5	感じる	(n=124)	6.621	1.8939	群間4、 郡内187	0.418
	4	やや感じる	(n=52)	6.288	1.5509		
	3	どちらともいえない	(n=7)	6.857	2.4103		
	2	あまり感じない	(n=6)	6.500	2.3452		
	1	感じない	(n=3)	6.000	1.7321		
出身地・購入希望	5	購入したい	(n=75)	6.493	2.0293	群間4、 郡内187	1.218
	4	やや購入したい	(n=55)	6.745	1.6691		
	3	どちらともいえない	(n=55)	6.509	1.6541		
	2	あまり購入したくない	(n=4)	4.750	2.0616		
	1	購入したくない	(n=3)	6.000	1.7321		
出身地・居住意欲	5	住み続けたい	(n=67)	6.597	1.9232	群間4、 郡内187	1.588
	4	住み続けてもよい	(n=58)	6.845	1.6522		
	3	どちらともいえない	(n=41)	6.317	1.8499		
	2	あまり住み続けたくない	(n=13)	5.538	1.8536		
	1	住み続けたくない	(n=13)	6.385	1.8046		

註：*** $p<0.01$

表11 名寄市・大学生2014の「幸福度」と地域ブランド・エクイティ評価に関する多重比較(名寄市)

				「幸福度」		自由度	F値
				平均	標準偏差		
名寄・独自性	5	感じる	(n=25)	7.360	1.9122	4 (註2)	5.729 (註2)
	4	やや感じる	(n=64)	6.422	1.7621		
	3	どちらともいえない	(n=51)	6.392	1.3278		
	2	あまり感じない	(n=37)	6.568	1.9796		
	1	感じない	(n=15)	5.933	2.6851		
名寄・愛着 4>1	5	感じる	(n=16)	7.188	1.7970	群間4、 郡内187	3.381**
	4	やや感じる	(n=49)	6.959	1.7316		
	3	どちらともいえない	(n=54)	6.685	1.4899		
	2	あまり感じない	(n=46)	6.130	2.0288		
	1	感じない	(n=27)	5.704	1.9575		
名寄・ 購入希望	5	購入したい	(n=15)	6.733	1.387	群間4、 郡内187	0.434
	4	やや購入したい	(n=52)	6.615	1.7394		
	3	どちらともいえない	(n=92)	6.489	1.9301		
	2	あまり購入したくない	(n=26)	6.577	1.8368		
	1	購入したくない	(n=7)	5.714	2.1381		
名寄・ 居留意欲	5	住み続けたい	(n=4)	6.500	2.3805	群間4、 郡内187	0.733
	4	住み続けてもよい	(n=15)	6.800	1.8205		
	3	どちらともいえない	(n=49)	6.796	1.6454		
	2	あまり住み続けたくない	(n=49)	6.571	1.5411		
	1	住み続けたくない	(n=75)	6.267	2.0817		

註：1) ** $p<0.05$

2) 「名寄・独自性」はデータの等分散性が仮定できなかったため、クラスカル・ウォリス検定を行ったが、項目間に有意な差はないという結果が得られた。

最初に①の可能性を検討しよう。幸福感構成要素(表5参照)のうち地域ブランド・エクイティ評価に関係すると思われる項目は「地域関係」「文化自然関係」であり、表7の結果から、有意な値ではないものの、「地域関係」は「家計状況」「家族関係」に次ぐ標準偏回帰係数の大きさを有している。これは①の可能性を支持する論拠のひとつとなり得る。ただし、反証もある。表9のような出身地に対する地域ブランド・エクイティ評価の高さが一般的に妥当する事実であると仮定すると、多くが斜里町出身と思われる斜里町居住若年層と、多くが名寄市出身者ではない名寄市立大学学生の現在居住地に対する地域ブランド・エクイティ評価を比較すると、前者の方が高くなり、結果として前者が後者より「幸福度」が高いはずである。しかし、すでに見たように、前者と後者の「幸福度」はほぼ同じ水準であり、①の可能性を否定する。

続いて、②の可能性である。ある地域で主観的幸福感の高い状態で生活すると、結果としてその地域への愛着や居留意欲、地域産品購入意欲が高まるという因果関係は合理的な説明として成り立ち得る。この場合には、現在の「幸福度」に差がないにもかかわらず、斜里町若年層は大学生より現在居住地に対する地域ブランド・エクイティ評価が高いと思われる点が反証となり得るが、〈現在の「幸福度」→現在居住地に対する地域ブランド・エクイティ評価〉という因果関係は出身地外に居住する者でのみ生じるとすれば、矛盾は生じなくなる。現に、表10のように、現在の「幸福度」と出身地に対する地域ブランド・エクイティ評価との

間に明確な関係性はない。出身地に対する地域ブランド・エクイティ評価は長期間の居住経験から形成され、現時点の「幸福度」からあまり影響を受けないと考えられるのである。つまり、斜里町若年層の「幸福度」は名寄市立大学学生と同程度であるものの、出身地（斜里町）に対する地域ブランド・エクイティ評価は、現在の「幸福度」というよりは、斜里町における長期間の居住経験の影響を受けているため、大学生の現在居住地（名寄市）に対する地域ブランド・エクイティ評価より高くなるのである。しかしながら、これらの点は現時点では仮説の域にとどまっているため、今後、実証的な証明が求められる。

5. おわりに

本論文の課題は、北海道農村部住民、具体的には斜里町民および名寄市立大学学生を対象に、「幸福度」の特徴、ならびに「幸福度」と地域ブランド・エクイティ評価との関係性を明らかにすることであった。

斜里町は「幸せを実感できる住みよいまちづくり」をコンセプトに、「幸福度」指標の政策的活用を開始している。町民を対象に「幸福度」に関するアンケート調査を実施するとともに、町の総合計画にその結果が一部反映された。だが、行政現場における「幸福度」理解の醸成、「幸福度」指標を政策的に活用する方法論の未確立、「幸福度」指標にもとづく施策の継続性といった課題がある。次に、「幸福度」水準や分布に北海道農村部住民に特有の傾向は確認されなかった。「幸福度」判断基準では「将来への期待」「他人との比較」の選択率が低く、北海道の地域性を反映している可能性もある。「幸福度」の主観的な重視事項については、地域差はあまりなく、若年層と非若年層との間の違いが示唆された。幸福感構成要素では、「家族関係」「地域関係」「身体的健康」「文化自然関係」で満足度が高く、「精神的健康」「社会制度」「雇用（大学生除く）」で満足度が低かった。続いて、出身地および名寄市に対する地域ブランド・エクイティ評価は全ての項目で前者が高かったが、「幸福度」と地域ブランド・エクイティ評価との関係性は名寄市に対する評価でのみ確認された。また、出身地外で居住する者に関しては〈現在の「幸福度」→現在居住地に対する地域ブランド・エクイティ評価〉という因果関係の生じている仮説を提示した。

最後に本論文の結論から示唆できることとして、市町村行政における住民の主観的幸福感を高める政策の重要性がある。現時点では仮説の段階だが、主観的幸福感の向上は、現住する地域への愛着や居住継続意欲といった地域ブランド・エクイティ評価を高めると思われる。つまり、地域ブランド・エクイティ評価を直接向上させる政策は当然として、それと直接関係しない政策だったとしても住民の主観的幸福感を高めることができれば、結果的に地域ブランド・エクイティの評価が高まるのである。地域社会の将来を担う若年層はその他世代と比べて幸福感を構成する要素が異なると思われるので、その点を考慮した施策が求められる。

【註】

- 1) 斜里町ホームページ (<https://www.town.shari.hokkaido.jp/index.html>、2014年12月15日アクセス)、「幸せリーグ」事務局編〔2014〕pp.68-71を参照。
- 2) 「北海道観光入込客数調査報告書」より。
- 3) 前掲資料より。宿泊者数の多さは、観光入込客1人あたり支払単価の高いことを示唆する。
- 4) 以下の内容は、2014年9月11日に斜里町企画総務課企画係へ実施したヒアリングにもとづく。
- 5) 「幸せリーグ」は荒川区を中心とした52自治体により2013年5月に設立された。「幸せリーグ」は通称であり、正式名称は「住民の幸福実感向上を目指す基礎自治体連合」である。
- 6) 出身地を尋ねる設問内容としては出身地、または人生の多くを過ごした地域とした。また、都市部か農村部かの判断は回答者の主観的な判断に委ねた。
- 7) 内閣府2010によると、15～29歳の「幸福度」分布も、斜里町2013などと同様のM形状となっている。そのため、年齢構成の違いが要因とは言えない可能性がある。

- 8) 「過去の自分との比較」に関して標準偏差は選択 1.7709・非選択 1.8319、自由度は群間 1・郡内 190、F 値は 5.042、「他人との比較」に関して標準偏差は選択 1.4546・非選択 1.8282、自由度は群間 1・郡内 190、F 値は 11.760 であった。
- 9) Shimizuike (2013) pp.105-108 を参照。

【参考文献】

- Aaker, David A. (1991), *Managing Brand Equity: Capitalizing on the Value of a Brand Name*, Free Press, 1991 (陶山 計介・中田善啓・尾崎久仁博・小林哲訳 [1994]『ブランド・エクイティ戦略—競争優位をつくりだす名前、シンボル、スローガン—』、ダイヤモンド社、1994 年)
- 荒川区自治総合研究所 [2012]「荒川区民総幸福度 (GAH) に関する研究プロジェクト第二次中間報告書」、荒川区自治総合研究所、2012 年 8 月
- Frey, Bruno S. (2008), *HAPPINESS: A Revolution in Economics*, Massachusetts Institute of Technology, 2008 (白石小百合訳 [2012]『幸福度をはかる経済学』、NTT 出版、2012 年)
- 町野和夫 [2013]「地域の『豊かさ指標』開発の可能性と課題」『地域経済経営ネットワーク研究センター年報』第 2 号、2013 年 3 月、pp. 37-54
- 内閣府経済社会総合研究所 [2011]「幸福度に関する研究会報告—幸福度指標試案—」、<http://www5.cao.go.jp/keizai2/~koufukudo/koufukudo.html>、2014 年 12 月 6 日アクセス
- Shimizuike, Y. (2013), “A Conceptual Model for Regional Brand Management: A Case Study of Shimokawa Town, North Hokkaido,” 『地域と住民』第 31 号、2013 年 3 月、pp. 103-113
- 清水池義治・吉中季子 [2014]「地域政策における『幸福度』指標の活用—先進事例の分析を中心に—」『地域と住民』第 32 号、2014 年 3 月、pp. 47-60
- 「幸せリーグ」事務局編 [2014]『「幸せリーグ」の挑戦』、三省堂、2014 年
- 斜里町 [2014]「第 6 次斜里町総合計画：平成 26 年度～平成 35 年度」、斜里町、2014 年 6 月
- 斜里町・第 6 次斜里町総合計画策定委員会 [2013]「平成 24 年度斜里町民アンケート調査 調査結果報告書」、斜里町、2013 年 6 月
- 辻隆司 [2011]「個人所得と幸福感の地域分析—所得と幸福感の関係に地域間格差はあるのか—」、日本経済政策学会第 68 回全国大会発表論文、2011 年 5 月
- 山根智沙子・山根承子・筒井義郎 [2008]「幸福感ではかった地域間格差」『Discussion Paper』No. 7、大阪大学グローバル COE プログラム：人間行動と社会経済のダイナミクス、2008 年 9 月、http://www.iser.osaka-u.ac.jp/coe/dp/pdf/no.7_dp.pdf
- 吉中季子・清水池義治 [2014]「福祉政策における『幸福度』指標の予備的考察—家族主義モデルからの検討—」『地域と住民』第 32 号、2014 年 3 月、pp. 33-46

【付記】

本論文は、平成 26 年度名寄市立大学道北地域研究所課題研究「寒冷過疎地域における『幸福度』指標の検討—定住自立圏における暮らしへの評価の試み—」(研究代表者：清水池義治)における成果の一部である。また、本研究は JSPS 科研費・若手研究 B「地理的表示制度における生産者組織を通じた地域空間ブランド・エクイティの向上」(課題番号：25850153)による助成を受けたものである。